

ブロック玩具を用いた“建築的自律性”の解像度に関する基礎的研究

片桐 悠自^{*1}, 井上 岳^{*2}

概要 本研究は、1960年代から議論され、近年再び取り上げられつつある「建築的自律性」を実践的に再考する。まず、これまでの「建築的自律性」の議論を、20世紀後半以降の建築分野に加えて、美学芸術、哲学、文学の文脈などを踏まえ、俯瞰的にとらえ、“複数の自律性”と呼べるような理論的な視座の輻輳を論じる。そして、ブロック玩具（レゴ®ブロック）を用いた、制作ワークショップを通じて、「建築なるもの」を問い直す。

研究背景と目的

建築は「自律的」だろうか？古くはルドヴィヒ・ヒルベルザイマーから、1970年代にはピーター・アイゼンマンによってその特権性を吹き込まれた「建築の自律性 Architectural Autonomy, Autonomy of Architecture」とは、それ自体、彼がクレメント・グリーンバーグらによる「芸術の自律性」を参照する身振りのうちにあったのではないだろうか？

一方で、「芸術の自律性」は、すでに時代遅れなものとなっている。マルセル・デュシャンのレディメイドから100年以上経った現代においては、建築もまた、極めて複雑化したアートの決まりごと（コンテキスト）の存在なくして—いわば「他律的」たることなくして—成立しない。ある形式における「歴史（現代芸術史）」のコンテキスト的参入を考えるならば、「芸術の自律性」はすでに無効化している。これに、環境美学／崇高の美学の潮流を加えるならば、気候変動／人新世といった地理的変動、AIやポピュリズムなど現代における危機的状況をも考慮しなくてはならない。

一方で、建築は、学問（または芸術）としての自律性が極めて弱い。昨今の「自律的な幾何学」が取り沙汰される際に、「作家性」の“自律”の表出だとすれば、個人的な様式論に終止してしまい、政治経済・技術・風土・個別かつ個人または社会的要因に依存し、建築が〈建つ〉という状況を無視した、非知性的な議論に終止してしまう。芸術においても、観者と美術館、非芸術と芸術など、人間と非人間の自律協生（コンヴィヴィアリティ）^{註1}が問い直されている今、探求すべきは、“建築家の自律”以上の、協働の可能性において建築の自律性を紐解き、“ひらく”ことである。本研究では、2つの方向性から理論的・実践的に「建築的自律性」を再考する。

まず、「建築的自律性」の議論を、20世紀後半以降の建築分野に加えて、美学芸術、哲学、文学の文脈などを俯瞰的にとらえ、“複数の自律性”と呼べるような理論的な視座の輻輳を論じる。もうひとつは、ブロック玩具（レゴ®ブロック）を用いた、制作ワークショップ（WS）を通じて、「建築なるもの」のあり方をヴィジュアルライズする。

^{*1} GROUP フェロー／お茶の水女子大学 准教授

^{*2} GROUP 共同代表

【様式 1】

A. 建築的自律性の系譜

A-1. モダニズム以降の建築論と自律性

近代以降の建築論において、「自律性 独:Autonomie」を議論したエミール・カウフマンは、『ルドゥーからル・コルビュジエへ: 自律的建築の起源と展開』(原著 1933)『理性の時代の建築』(原著 1955)で議論しているように、新古典主義から 20 世紀に至るまでの、建築史的な共通言語の探究において、新古典主義からモダニズム建築にいたる様式をと連関させた。また、ヒルベルザイマーも、モダニズム建築に至るまで造形の「自律性」を発展史観的に論じている。こうした視点は、建築理論家コーリン・ロウなどに影響を与えている

特に、時間／空間といった形式の文脈から自らの建築論を論じたのが、ピーター・アイゼンマンである。アイゼンマンは 1970 年代に、「ニューヨーク・ファイヴ」として、ロッシと交友を深めることになる。彼の設立した「IAUS (建築都市研究所)」の発行した雑誌『オボジションズ *Oppositions*』がなければ、アルド・ロッシやマンフレッド・タフーリといったイタリアの建築論の文脈が、英語圏に紹介されることはなかっただろう。

A-2. 複数の自律性：イタリアの場合

まず、「建築的自律性」の文脈について、イタリアにおける建築論の国際的な合流、特に第二次大戦後の「合理主義 (ラショナルリズム)」について再考してみたい。

イタリアにおける「自律性」は、「政治的独立性」が前提となっていた。これは、イタリアの建築家の多くが、マルクス主義的精神文化を共有していたことが背景にある。アルド・ロッシの『都市の建築』(1966)は自律的な「学」としての、具体的な建築を起点とした「都市学」の樹立の必要性が議論された。ロッシは、ヴェネツィア建築大学での講義録「美術館としての建築 *Architettura per i musei*」(1966 年、出版は 1968 年)にあ

公益財団法人 窓研究所

らわれているように、建築史における形式の個別性を、個人的主体の自伝的選択をもとにした弁証法的プロセスを介して設計する「類推 (analogy, it: analogia)」を主張し、建築運動「テンデンツァ」へと結実した。

同時期に、歴史と設計における建築形態の参照における〈フォルマリズムの視点〉を持ち込んだのが、マンフレッド・タフーリである。タフーリは『建築のテオリア』(1967)^[6]において、形態の〈絶対性〉、近世 (ルネサンス) 以降の、都市における形態の極端な抽象化に着目したうえで、1960 年代におけるルネサンスからマニエリスム、新古典主義、モダニズム建築の形式の潮流における複合性と曖昧さを描き出した。この頃、設計者と建築史家のあいだを彷徨っていたタフーリは、形式のもつ他律的なイメージ (歴史への参入) を解き明かすことは、喫緊の課題であり、V.シクロフスキーなどのロシア・フォルマリズム、W.ベンヤミンなどのフランクフルト学派、M.フーコーなどのポスト構造主義的視点を取り入れながら、〈建築史の自律 (ある意味でそれは、発展史観的なものを残している)〉に基づいて、「自律的な/政治的な学」を抽出することを試みた。タフーリとの交友においてロッシも、建築学における、〈建築史〉の自明性と必要性を前提に、自身の理論と設計を記述していった。

一方で、アイゼンマンらによるロッシやタフーリの評価は、建築が建築として遊離し、社会・経済・政治とまったく関わりのない「(建築) 形態の自律性」の文脈に組み入れることがその評価の目的にあったといえるだろう。本来、イタリアの文脈で政治的であった「自律性」が、非政治的な「形態の自律性」へと転位したのである。

A-3 プロセスをひらくこと

近年、アイゼンマンは、「建築における内的なプロセスを、そのプロセスがもつ可能

【様式1】

性へと開くのが自律性なのである」と述べる^[1]。これは、ジャック・ランシエールが述べる「ある形式における感性的経験の自律」^[2]と関連づけられるだろう。ランシエールが批判する「為すこと（為されたこと）」の自律性は、モダニズム的（ないしはグリーンバーグ的な）抽象化や芸術形式の純粋性へのフォルマリズム的な志向を指す。一方で、フォルマリズムであろうとアンフォルメルであろうと、なんらかの形式のもたらす芸術固有の経験が、われわれの生に連関する。現代で生じるはずの「建築的自律性」もまた、このような意味で理解してみたい。つまり、“開かれた”建築の自律性とは、形式の発生それ自体に伴う、経験の共有可能性であるという仮説である。再度カウフマンに立ち戻るなら、材料と形式、生命について、以下のようにのべている。

材が固有の法則を持つことが一般に認められて以来、有機的な諸形態を生命のない素材に付与することはもはやなくなる。[...]大革命後の建築にとっては、石が再び石になる。石の持つ自然な組成が十分な価値を担うに足るものとなる^[2]。

ここで「建築的自律性」を「組み立て玩具の組み合わせのような形式」（カウフマン1992, 98）とみなす記述がみられる。それは、重力が物質と相互作用する働きを触知化するためのある方法として共有可能なものなのだ。

B.研究成果と考察

B-1. ブロック玩具を用いた WS

材料（石材）のもつ可能性を、組み立て玩具（ブロック玩具）に見立て、建築のエレメントを制作する学会WSを展開し、「建築の自律性」をひらくための可能性を模索した。表象文化論学会第19回大会（2025年8月30日）の公益財団法人 窓研究所

査読付きWS「家の柱」ワークショップ ブロック玩具は建築的自律の夢を見るか？」を行った（図1,2）これはすでに報告者らがGROUPとして制作した2件の柱を参照している（図3,4）



図1, 2 表象文化論学会第19回 大会WS
「江古田のツインタワー」

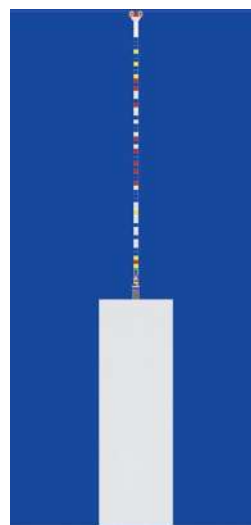


図3 「家の柱」



図4 「神保町の窓」

【様式 1】

ここで報告者らは、「壊されてはじめて残る、柱」が、「世界を表象できる可能性」であることを論じた。いわば〈アクシス・ムンディ（世界軸）〉としてのブロック玩具の柱は、その時のある形式を得た際の情景と不可分であり、物質に固有なナラティブが重ねられることを説明した。

制作を通じて見えたのは、協働が作品のスケールや匿名性のあり方を変化させ、新たな自律性を開く可能性である^[7]。

制作開始とともに実測したところ、会場の天井高が3mでありこれまで立てられた柱が2,5mである。2本の細い柱を建てようとする、2,5m程度を超えたところで、天井に完全に固定されるまでは壊れやすく、この方策によると崩壊してしまうことがわかった。

協働のなかで、施工中の遷移状態であるところのタワーを安定させるために、2本の基礎を隣接させ、デュプロブロックの長方形プレートパーツで架橋する方策が立てられた。いわば、当初の制作で想定していた「離れて独立した2本の柱」ではなく、隣接して合体した「ツインタワー」が、制作のなかで共有された。なお、持参した脚立では十分な高さがなかったため、武蔵大学の脚立を借りた。隣接する2つの柱は部分的架橋された梯子型で、フィーレンディール橋を縦に置いた中間形態からなる。これにより施工中にも安定して、自立可能となった^[9]。

また、同時期の2025年8月に行われたAFGS（アジア図学会議）の招待講演においては講演内WSを行った（図5）。会場であるチェンマイ大学地質学部における恐竜のモニュメントを参照するかたちで、恐竜を即興で制作し参加者3名による成果物があらわれた。

近年、ティラノサウルスの復元においては、「唇」が表現されている（図6）。原生のワ
公益財団法人 窓研究所

ニ類と異なり、歯がむき出しにならず、歯の劣化が少ないという近年の仮説を反映している^[12]。

恐竜のかたちは非常に抽象的なかたちの集合のもとで成立しているイメージの複合である。再現模型やぬいぐるみとしての一つの表現となったとき、触知的経験を提供する。これは、これまで報告者らが発表してきた「抽象建築（アブストラクト・アーキテクチャー）」と同様、〈完全な復元が不可能なかたち〉でもなんらかの形式を仮構し、史的違反を前提とした事物が経験される建築の形式/記号性と共通している。アルド・ロッシが『都市の建築』で論じた都市建築の性質もまた、この「触知性」にあった。^{[4][5]}

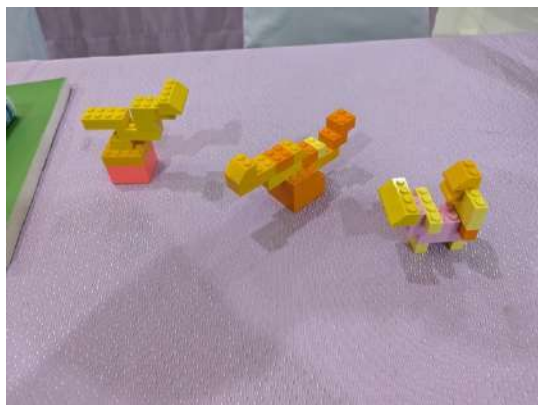


図 5 AFGS 招待講演での恐竜 WS



図 6 福井恐竜博物館におけるティラノサウルスの復元（唇を閉じた状態）

【様式 1】

触知的記号を経験として共有することは、1970年代以降のモダニズム建築の教育への参照／違反を議論するかたちで日本図学会2025年大会発表（2025年11月8-9日）の作家論発表へと展開された。ロッシやジャンウーゴ・ポレゼッロ、坂本一成、篠原一男といった20世紀前半のモダニズム建築の教育を前提としながら、その形式を逸脱しようとした建築家についての発表を行った。^{[14][15][16][17]}また、同発表にあわせ、新たな「柱」である「日野のタワーノマド」を制作した^[18]（図7,8）。



図7 「日野のタワーノマド」

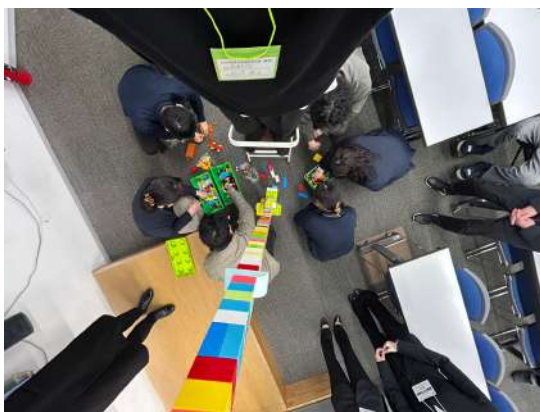


図8 「日野のタワーノマド」制作風景

さらに、表象文化論学会オンライン研究フォーラム（2025年12月20日）においては、ロッシとルイジ・ギッリの写真表象をもとに「触れられる記号」について議論した。今後、建築なるものの“解像度”について議論する。“協働の自律性”を前提とするなら、「建築」や「建築家」についての“コンテキストの解像度”に加え、設計や施工における“プロセスの解像度”，環境美学・工学，感性学やアートにおける“アウラの解像度”（ある種のリアリズム的価値）も問題となってくるだろう。

B-2. 考察

しばしば設計者は“作家の”自律性を保つために役割を純化し、個人のブランドを高める巨匠主義へと陥ってしまう。建築をつくる際の協働の関係性は見えづらくなる。

こうした、“作家（建築家）という主体”の神話への批判を、「自律性」に込め直すならば、事後的に与えられた「建築家の自律性（創作性）」という、制作設計プロセスにおける協働が隠蔽されてきたことへ目を向けなくてはならない。

破片の形式は、歴史のなかで共有された、閉じられた系にある全般的な「像（類型）」をもちながら、部分部分で自律した具体的な事物である。具体的な事物は、「協働」のモメントにおいて、“近代的主体”の前提となる「自律」を違反する経験を共有する。

「建築」をつくることは、目の前を通り過ぎてしまう風景を問いかけ続ける行為である。それはまさしく「複数の自律性」へ開くことでもある。時間と空間だけでなく、質料や色も固有の形式としてそれぞれの記憶へと参入する。そこには協働のもたらす制作の“解像度”のズレをとまなうことによって、創発的なモメントが形成されると考えられる。

注

【様式 1】

- 1) キュレーターの高木遊は、イヴァン・イリイチとニコラ・ブリオーの哲学を引きながら、自律協生（コンヴィヴィアリティ）のあり方を強調する。彼がキュレーションを行った「SIDE CORE」展は、ストリートアートの美術館の参入を中心とした「自律と協生の閾値を丹念に調整する」試みであり、「建築の自律性」へも適用可能だろう。^[13]

参考文献等

- [1] EISENMAN, P.: "Autonomy and the Will to the Critical", *Assemblage*, No. 41, 90-91 (2000)
- [2] エミール・カウフマン『ルドワーからル・コルビュジェまで—自律的建築の起源と展開』白井秀和訳, 中央公論美術出版, 一九九二
- [3] ジャック・ランシエール, 『美学における居心地の悪さ』松葉祥一・椎名亮輔訳, インスタリプト, 2025
- [4] ROSSI, A.: "Architettura per i musei"(1968), *Scritti scelti sull'architettura e la città 1956-1972*, Milan: CLUP(1975), 323-339
- [5] アルド・ロッシ『都市の建築』大島哲蔵・福田晴虔訳, 大龍堂書店, 1991
- [6] マンフレッド・タフラー『建築のテオリア』八束はじめ訳, 朝日出版社, 1985
- [7] GROUP「協働の輪郭 | Group Form 第1回「スケールの所在, 匿名性のかたち」(インタビューイー／玉山拓郎 / 現代美術家) [https://hitotsuchi.media/group-form-1/\(2026-03-31\)](https://hitotsuchi.media/group-form-1/(2026-03-31))
- [8] 片桐悠自『アルド・ロッシ 記憶の幾何学』, 鹿島出版会, 2024
- [9] 井上岳「他者と他者をくっつける」 [https://www.cemedine.co.jp/cemedine-reports/gakuinoue.html\(2026-03-31\)](https://www.cemedine.co.jp/cemedine-reports/gakuinoue.html(2026-03-31))
- [10] 片桐悠自「第19回大会報告 ワークショップ

- 「家の柱」ワークショップ: ブロック玩具は建築的自律性の夢をみるか?」」 <https://www.repre.org/repre/vol55/conf-erence19/4/> (2026-03-31)
- [11] COSTANTINI, P.(ed.), *Luigi Ghirri/Aldo Rossi: Things Which Are Only Themselves*, Montreal: Canadian Center for Architecture (CCA), 1996
- [12] 福井県立恐竜博物館『福井県立恐竜博物館展示図録』, 2版, 福井県立恐竜博物館, 2024
- [13] 高木遊「SIDE CORE というキュレーション」『SIDE CORE Living road, Living space / 生きている道, 生きるための場所』, torch press, 2025, pp.120-136
- [14] 片桐悠自, 柏崎健汰, 奥島千晶, 齋藤直紀, 井上岳, 「建築の自律性をひらく—ブロック玩具でつくる“家の柱”—」『日本図学会大会2025年度日本図学会大会(東京) 大会学術講演論文集』, 151-156.
- [15] 柏崎健汰, 片桐悠自「建築の自律性は触知可能か?—ジャンウーゴ・ポレゼロにおける「スケール」と「質」の考察を通じて」, 同誌, pp.145-150
- [16] 関森萌, 小峰千宙, 片桐悠自「アルド・ロッシ「幕張・太陽の塔プロジェクト」(1991)の建築的構成と制作の可能性」, 同誌, 125-130,
- [17] 松浦早希, 片桐悠自「篠原一男の初期住宅における〈虚の立方体〉について」, 同誌, 131-136
- [18] 奥島千晶, 片桐悠自「坂本一成の初期住宅作品における虚の立方体への〈違反〉」, 同誌, 39-44
- [19] レゴ「家の柱ワークショップ ブロック玩具は建築的自律の夢をみるか?」画像レポ <https://legokei.com/article/ienohashira20250831.html> (2026-03-31)